

『聖なる引き算の数理』

—簡素と過剰をめぐる考察

I. ガジェットの墓標

あなたはいくつ、きらめくガジェットを持っていますか？
そのなめらかな機械は、それぞれ鏡のような仮面ではないでしょうか。
それらの道具は、本当にあなたの実際のニーズを満たすでしょうか。

それとも、孤独な魂が入り組んだデジタルの蜂の巣に
身を隠すための手段にすぎないのでしょうか。

輝きを失ったガジェットが迎える墓標とは、どのようなものか。
捨て去られ、やがて静脈のような薦にゆっくりと覆われるのだろうか？

土とヘドロがその形を変え始めるとき、
鏽はその福音となり、塵はその詩篇となる——
それらは慟さを不気味なほどの静けさで刻む。

廃棄物を無害な物質に変える鍊金術を学ばない限り
水銀、アンチモン、鉛、そして残留性有機汚染物質は結びつき、
それらは人の肉体を脆くし、神経の構造を触んでいく。

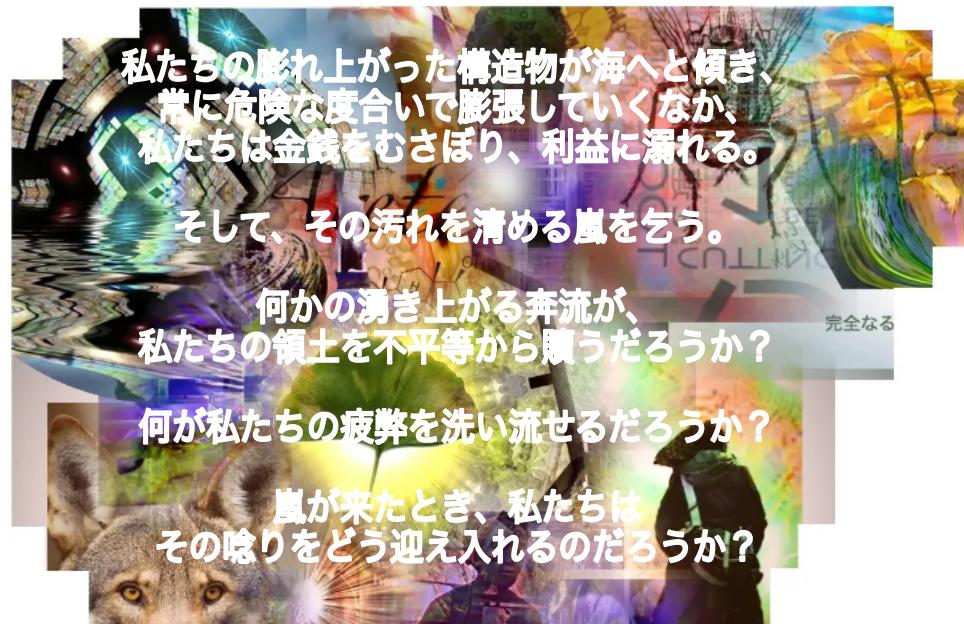
II. 帝国の過剰

老いた帝国が、その玉座を有毒な雑草で満たされるまでに
必要とする墓所はいくつあるだろうか？

私たちは、飢えた害獣のような虚栄心を満たすために、
すでに十分なほどグロテスクな創造物を呼び出してしまったのではないか？

私たちはどんな新たな忌まわしい行為を公言しようとしているのか？

私たちは、簡素に生きるという聖なる算術を学び、
より少ないもので満足を見いだすべきではないだろうか？



玲亜: (豊かでビロードのような笑いが皮肉を帯びて漏れる) ああ、この絶妙なパラドックス！ シンプルさについてのこの詩が皮肉にもバロック様式で迷宮めいて複雑だなんて！ なんと皮肉な！

ティン: (哲学的にななめに肩をすくめ、瞳は穏やかで遠くを見つめ) もちろんだよ。簡素さは、複雑さの影から生まれるものだ。複雑さを経験せずに、どうして人は簡素さに憧れられるだろう？

ティム: (重い溜息をつき、暗い雰囲気を持ちながらも静かに背を傾ける) もし簡素さを望むなら、おそらく人間性の本質を放棄しなければならない。人間であるということは、矛盾するぶつかり合う、碎けた城塞を背負うことだ。人間であることに、単純なことなど何もない。

玲亜: (首を振り、口元に挑戦的な笑みを浮かべる) 簡素さを見つけるために、原始のスープに溶け込む必要なんてないと思うわ。ただ、組織化された信仰の前にひざまずき、教義の抱擁に身を委ねればいいの。世界の野蛮な混沌を、たった一つの聖なるレンズを通して解釈し、古代の経典を羅針盤に時には鑑とするのよ。宗教は強制された簡素さを与える——手入れされた、安全な堀に囲まれた庭の中で、吠える荒野を押しとどめるの。

ティム: (確固たる確信をもって頷き、声は深く、大地のような響きを帯びる) ご存知の通り、それは多くの人々には通用しない。落ち着きのない心を持つ我々のような人間は、完璧な幾何学を持つ厳格で磨き上げられた教義に反抗しがちだ。 遅かれ早かれ、私たちは「完璧な」平和を約束するあらゆる壁を蹴破ることになる。完璧な簡素さ——疑いも内なる矛盾もない人生——は、大人の大多数にとって不可能に見える。それを達成できるのは、結果から守られた乳児、機微を理解できない愚者、あるいは、進んで疑う力を焼き捨てた狂信者だけだ。残る私たちは、ごちゃごちゃした、混沌とした中間地点に生きる運命なのだ。

- T Newfields (和訳:sugurunyanとwanderer)

開始: 2004年 名古屋市 完成: 2025年 静岡市